
Lost the Key II

下弦 鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Lost the Key II

【Nコード】

N7561D

【作者名】

下弦 鴉

【あらすじ】

『Lost the Key』。それは、失われた『鍵』。人の『心の扉』を開く、唯一の『鍵』。貴方には、ありますか？失くしてしまった、大切な『鍵』が。これは、そんな『鍵』を探す物語。忘れてしまった何かを取り戻す、そんな物語。第二段です。

白く塗られた壁。白く飾られた部屋。白い風が揺れる窓。全てが白いこの部屋に、私はいつからいたんだろう。私はいつまでここにいればいいんだろう。

この部屋でたった一つの色、それは私。たった一人、私だけ。

「叶美ちゃん、お薬の時間だよ」

「……」

やっぱり白いその人は入ってきて、にこやかに薬を手近寄ってきた。

何がそんなに楽しいんだろう。何がそんなに嬉しそうなんだろう。何がそんなに……。

「はい、口開けてえ。あぐん」

苦い味が、渴いた喉を刺激して、去っていった。潤してくれたはずの水が、なんだか恨めしかった。

「じゃ、また次の時に来るからね」

手を振って去って言った白い人。どうでもいいのに、うらやましい。

私だつてこんな所にいなかったら、あんなふうに笑ってられた。私だつてこんな所に閉じ込められてなかったら、あんなふうに明るくなれた。絶対に、そう思う。

「……はあ」

「つまらなそうですねえ」

そして現れた。白以外の色。私以外の、色の持ち主は。

「つまらないときは、楽しい事を想像します。すると、何故だか楽しくなりますからね」

白じゃない人。その人は帽子を目深に被って楽しそうに笑っていた。ドアを背にして、そこに描かれた絵のように。

その被った帽子も、服も靴も、杖までもが真っ黒。綺麗な黒。この白い空間に、その人は浮いているように見えた。

「そんなにもめずらしそうに見ないでください。まあ、珍しいかもしれません」

そしてまた、楽しそうに笑った。

「どこが楽しい？」

思わず聞いてしまつて、自分でもびっくりする。人と話をするなんて、すつごく久しぶりだったから。

「ふふふ。それはね、貴方とお話できる事、ですよ」

また楽しそうに笑つて、杖をいじる。黒の手袋をした手は、鮮やかに、優雅に杖をもてあそんだ。時にくるつと一回転し、時にただ空中を彷徨うだけ。それでも十分、私の目には鮮明に映った。

「さあ、それより貴方にお渡ししたいものがあつてきたですよ」

「私に？でも、……ここより外に、友達なんていないわ」

だつて、ずっとこの白い建物に閉じ込められているんだもの。友達なんて、絶対いない。

口だけで困つたような表情をし、その黒い人は困つたように呟いた。

「友達？はて、それはなんでしょう？私の知りえないものですね」

「友達を……知らないの？」

「私には、必要のないものだからでしょうね」

「……」

友達が必要ないなんて、悲しい気がした。うつむいていると、すつと頬に手が触れる。暖かった。

「私のために、悲しんでくださるのですか？貴方はお優しい方です」

クスツと笑つたかと思うと、その人はもう、離れていた。

「私、優しくなんかない。ただ、ちよつと……」

「ちよつと、なんです？」

自分でも分からない。なんでこの人に話してしまうのかも、それすらも分かっているのに、質問に答えられる訳がない。

「まあ、そんな事はちよつとした雑談だったという事で。私がここに来た目的、それは貴方に『鍵』を渡す事です」

「か、ぎ？」

「そう、『鍵』です。とつてもとつても大切な、『鍵』です」

また、薄い唇が笑う。また、黒い杖が空を舞う。

「私の言う『鍵』は、どこにでもある鍵ではありません。この世界にたった一つしかない『鍵』です」

「たった一つ？なんで？」

気になる。話が、もつともつと聞きたい。

「それは、記憶の『鍵』だから。大切な記憶の『鍵』だからです」

「記憶に鍵なんてないわ。あるのは扉の鍵だけ。他に鍵が必要な

のは

「それですよ。『記憶の扉』の『鍵』。ホラ、『鍵』の存在する理由ができました」

「でも、そんなの目に見えないわ。あつたとしても、意味ないも

の

「それはどうでしょう？」

警告音のように、杖が冷たい床を弾いて、カツンと硬い音が部屋に響き渡る。

「目に見えないから存在しない？手で触れないから存在しない？

そんなの、不公平だと思いませんか？」

「……」

言葉が出ない。黒い人の声に、杖の動きに引き付けられて、逃げられない。

「想像する事、それはとても素晴らしい事、素敵な事です。それなら、信じたいという気持ちも、大切にされますからね。目に見えぬもの、手に触れぬものほど、信じたい気持ちはみながもっています」

「……」
「さあ、そんな信じる気持ちを探しに行きましょう。大丈夫、何の心配もありません。ただ、失くしたものを探すように、『鍵』を探すだけですから」

「失くしたもの……『鍵』……」

「行きましよう、探しに。きっといい事が待っていますから」
知らないうちに、私は頷いていた。

最後に聞き取ったのは、再び響いた、杖の音だけ。

*

変わらない、白い部屋の中で、私は立っていた。いつの間にか、立っていた。

「さあ、『鍵』を探してください、時間が来る前に」

落ち着いた、あの黒い人の声がどこからか聞こえ、跳ね返る。それなのに、不思議とよく通る声だった。

「大丈夫、何の心配もありません。ただ、探せばいいのです、『鍵』を」

「場所はどこ？教えてよ！」

くうを見上げて、空に叫ぶ。……空？

「あ……れ？」

部屋だと思っていたのは、勘違いだった。ここは、あの部屋なんかじゃない。私が閉じ込められていた病院。その外だった。

「どうかしましたか？そんなに空が不思議ですか??」

落ち着いた声は、ただ響き渡る。私は何もいえないで、ただ空を見上げていた。

「さあ、探しましょう、『鍵』を。そしたらきっと、本物の青い空が見えますよ」

「本物じゃ、ないの?」

「ええ、ここは俗に言う異世界のようなもの。本物のはずがありません。さあ、急いで。時間がなくなってしまう」

「言われてみれば、普通の空じゃない気がした。雲が動かないから、そう見えたのだろうか。」

「さつきから時間時間って、何かタイムリミットでもあるの?」

「ええ、時間に制限があります。ここは貴方達がいていいような世界じゃない。ですから、早く立ち去らなければなりません」

「分かった。でも、せめて『鍵』の形だけでも教えてよ」

「『鍵』の形は決まっています。人の記憶によって異なり、原型などありません」

「……じゃあ、何か特徴はない?」

「そうですね……。『鍵』のある場所だけは、色があります。けれど、私には認識できないので、それは事実が分かりません」

「認識できない?なんで?」

「それは秘密です。さあ、早く探さないと、『鍵』が消えてしま
う」

その声に急かされるように、私の足はゆっくりとある場所へ向かって歩みを進め始めていた。

どこもかしこも、きれいな白。けれど、どこか違った雰囲気のは、静かで、時の流れを忘れていたようだった。

人がいるはずのベットに、人がいない事に驚きつつも、ゆっくりと私は進んでいく。どこもかしこも白い中で、絶対に行きたくなかった部屋が見えてくる。詳しい事は覚えていないけれど、二度と近寄らないと誓った部屋。そこに周り違った、白い色が付いているような気がした。

「……まさか、ここにあるのかな?」

ひよっこりと顔を出し、その部屋を覗くと、やはり色がついていた。見舞い客用のいすが、薄い水色をしているから、分かった。他

の所は、全部真っ白だったのに……。

その主のいないベッドに、ほのかな光を放つものがあつた。それに近付いてやっと、『鍵』である事が分かつた。二つに枝分かれしたような『鍵』は、まるでハート型。それを飾るように、絡んだ蔦に花が咲き乱れていた。

「……これ、あつたかい」

「……それが『鍵』です。よかつた、早く見つかつたようで」

「でも、これ、どうやって使うの？」

「胸に当てて、それで目を閉じる。それだけで、結構ですよ」

言われたとおりに暖かな『鍵』を手に取り、胸に当てる。その暖かさが服を伝つて体に伝わってくる頃、私はそつと、瞼を閉じた。

カチツ

「さあ、思い出してください、貴方には必要な記憶です。大切な、思い出です」

*

「ねえ、カナちゃんは、ここを出たら何がしたい？」

「え？」

私の声が、重なつた。黒い人の声が聞こえ、急に不安になつて目を開けた時、既にここに私は立つていた。場所は代わらないけれど、主のいなかったベッドに、人が横たわっている。そして、その子は私を『カナちゃん』と呼んだ。私の、たった一つのあだ名で。

「え？つて、何？？だつて、明るい事を考えたほうが、楽しいじゃない！」

「でも、でもさ。病気が治らなかつたら、一生出れないんだよ？」

「それでもいいの！考えるのつて、結構楽しいもの！」

やつぱり、去年死んでしまった、同じ年だつた那美ちゃんだつた。

私も、彼女と一緒にの病室にいた時の、ほんの些細な時間を過ごした、大切な友達だった。

「ねえ、カナちゃんって、ピーター・パンとか信じないの?」

「うん。だって、本当にそんな人がいたら、大変なニュースになってるよ」

「アハハツ! そうかもね。でもさ、本当にいたとしたら、どう思う?」

「いないって」

「だあかあら、いたとしたらって言ったじゃない」

「……いたとしたら、私も一緒にネバーランドに連れて行って欲しいな」

「それで?」

「それで!?!……うん、たくさん遊んで、たくさん踊ったりして、笑って過ごしたいなあ」

「そう! それよ!!」

「何!? 急に大きい声出して。那美ちゃん、どこか痛くなったの?」

「違うよ、違う! それでいいんだよ、考える事って!」

変わらない笑顔で語る那美ちゃんは、とっても楽しそうなのに、何て私は不細工な顔をしているんだろう。なんで、私は、笑えないんだろう。

「考える事って、ホラ、さっきみたいなさって、楽しそうでしょう!? いつも無愛想な那美ちゃんだって、笑って過ごせるって思えるでしょう」

「……うん」

「だからね、きっと大丈夫って信じればいいんだよ」

「何を?」

「病気が治るって! 病気が治ったら、私は、家に帰っていっぱいお母さんたちと遊ぶの! それでね、ずっとずっと笑っているの! みいんなで、楽しく一日を過ごすんだ!」

「でも、治ったらの話でしょ？」

「だから、考える事！大丈夫だって、信じる事！そうすれば、夢
だって叶うわ」

「そうかな？」

「そうだよ！お母さん、言ってたんだ。『もし、貴方が苦しい時、
辛い時は、楽しい事を考えなさい。それで、その事を信じるの、信
じ通すのよ』って。だから、私、楽しい事を信じるんだ！！」

「そうしたら、私も笑えるかな!？」

「うん！だって、楽しい時は、笑うでしょ？」

「そうだね……うん！そうだね!!」

……私が、笑ってる？この私が、笑ってる。不器用で、不細工で、
汚いけれど、あれは笑ってる。とつても、とつても楽しそうに。

「だからね、カナちゃんがとつても寂しい時、悲しい時、嬉しい
事とか、楽しい事を想像してごらん。きっと、んくん、絶対笑える
ようになるから！」

「いつでも、笑えるかな？」

「うん！」

「私でも、笑っていいのかな!？」

「うん!!もちろんよ!!」

きれいな笑顔の那美ちゃんは、私の汚い笑顔に向かって、本当に
楽しそうに笑っていた。

「……じゃあ、もし、立ち直れないくらいの悲しみに私が立ち向
かえなくて、笑えなくなつたとき、どうすればいい？」

「……そしたらね、空に向かって、ピースして！それで、叫ぶの
！」

「なんて？」

「青空さんにお問い合わせ事があります！その蒼さに、私の悲しみを混
ぜてもいいですかっ！」

「それ、お母さんが言ってたの？」

「んくん。自分で考えたの！でもね、本当にそうすると、胸の辺

りがスツキリするんだ!」

「だから那美ちゃんは、いつも楽しそうなの?」

「うん。空がね、私の代わりに悲しんでくれるから、私は笑っていられるの。空が笑えない代わりに、私が笑うの!」

とびつきりの笑顔が眩しいのに、歪んで見える。きつと涙が瞳を濡らしているから、余計にこんなにも笑顔が綺麗に見えるんだね。

「じゃあ、私もやるね!」

「じゃあ、そのぶんカナちゃんは笑顔でいてね!」

「うん、約束する!」

「約束、だよ」

……ゴメンね、ゴメン。本当に、ゴメンね。今の私、那美ちゃんとの約束、思いつきり破ってる。ゴメン、ゴメン。

*

「嘉納^{かのう} 叶美、貴方は思い出せましたか、大切な記憶を」

ぎゅっと抱きしめた『鍵』の暖かさを感じながら、私はその声に頷いていた。

「約束事は、とても忘れやすく、脆いもの。破ってしまうのも、守り通すのも、とても簡単です。けれど、一度大切に守り通せば、とても輝く、心の光となります」

「……私は……私」

頬に、優しい掌の感触だする。あたたかい、心が落ち着く。

「悲しみをバネに生きるのも、人の道。ですが、悲しみを乗り越えて進むのも人の道です。そのように、一つの選択肢だけでなく、いろいろな選択肢の中で、最も適したものを探し当て、それを道標に生きなくてはなりません。不自由なようで、とても美しい人の道です」

「……私には、護れないよ……」

「それもそれで、一筋の道となり、結果が待っています。けれど、結果は変えられます、貴方の生き方次第で」

「……」

「さあ、貴方はもう、大丈夫。独りじゃない事も分かっていますし、何より、約束という名の優しさが、貴方を護ってくれていますから」

*

次に目を覚ました時は、もうあの部屋で、寂しい気がした。けれど、本当は寂しくない。

「叶美ちゃん、お薬だよ」

「……はい」

ねえ、聞いて、那美ちゃん。私ね、また、空にお願い事したんだよ。今度こそ、笑って青空さんに恩返ししますって。だから、もう心配ないよ？私は私なりの未知を信じて進むから。

もし、あの黒い人にあつたら、言っといってくれる？一言でいいんだ、有難う。それだけでいいから、いっといってくれると嬉しいな。

(後書き)

拙い文章でしたが、どうでしたか？短編ですが、感想などいただけたら嬉しいです。今度の参考にしたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7561d/>

Lost the Key II

2010年10月10日13時19分発行